



泚
鴻
文
庫
—
二十九

24
一
つ
特
選
集

5
1139
24





白牙
之



明治三十九年三月二日
野上 芳次 氏寄贈

利八門
號 1139
卷 * 24

24

應真若海
為了轉
華松庵主
長



Small red seal impression and faint text at the bottom of the right page.

神魂不死無始無終



悟妙境其樂無

窮游乾坤外極而

露恩春風秋月潭

可轉翁

示可轉老翁

大教正位平山有翁

西肥藤隆奇書



序

三日書を後きき及右左
殿と仰さうし三日句を
さうたれ口又いさうの
たうさうし甲斐又の如
の轉老人の筆は又は事



あらまゝ今迄の事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事

老人の事
 あらまゝ
 夜鳥の事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事
 ありし事



市の春の風をうけて初春のうら
茶の枝をさめて残る人こころを
よみよみよみよみよみよみよ
らりりりりりりりりりりり
あふあふあふあふあふあふあふ
昭和二十二年十月 春の
社徒編

可轉發句集

春之部

景且

凜々冬年紅雲如や 山径を踏
やう遠き春の優美をを川に
初春の 春の如きくをたすを
いね積りてやもきく知の磯あり

新巻 年表

所 障也先々々々々の 新 布
つ 志り能 疎くそのまを 兼の雪
活 其まを人の上より 初めす
杖 笠を 都に つけ了 袖子の日
暮 暮の 盡たのまを 於 蕭 二う 水
七 暮を 活むに 以て 石 和 中
弓 矢 終る もの 終る 一 終る 基

水を紅羽を 一 終る 守る 胸を 水

落る 霧 雪の 暮 暮 暮 暮 暮 暮

を 暮 雪 あり 梅 あり 梅 あり

落 雪 布 志る 一 梅 小 梅 あり 正

大 東 登 難 息 膝 の あり の 正 海 正

暮 暮 あり あり 志 終 中 猫 終 暮

老木あやしく何れを慕ふは毒の毒
あり之も梅紅の如くも人 鹿の
一陽本後

凍つて梅の先よりうたはるる
空波に流るる梅紅花

酒買ひ人常 杉多し梅もむ
宗之嘉菜吾妻八重は朱紅多し

空 春より入るる 夜もや月と梅

笛吹川 運定

月影も 毒に 挿さす 下り 船

夕うけ 木 梅の 梅も 水乃 鏡

一葉も 二葉も 三葉も 折り 舟

管中 七葉 蓮 一 里の 原

黄くもや日をのきくよは波は先
くくもやや甜も家たまに付て啼
妻うまをい陽く遠く神物
能つる指様さるる陸う水

文取も来風や雲もれ吹おほく
道端より折さす業や初霞
兼路もれみよく着きや去る白

芝原中 高き飯を煮る水の
間 たたきく二月にたまに雨紅お

別れくも聖白毫佛に世にたり
管業所へ佛の口の鶴う水

慈母五千回忌懐念

春あけの朝出たまひと煙り
又さくくくときめく懐念はく

塩屋を扉目にうきあへきお月
おく雲を過ぐたはりの御月
芽みおろしと手おひねり木槿垣

越るかき笑ひうきあへきお月

長閑さ中水をおくおく子西川

雨あそびをそのく次はに具へて片うき

晴るよりおきそよ経 晴しそよ経
晴るよりおきそよ経 晴しそよ経
朝虹を晴消を維るおひねり
おひねりの臨みおきそよ経

おろしそよ経 榎の初はら
おろしそよ経 榎の初はら
榎の初はら 榎の初はら

初高年 提了 通々也 本兼 町

左高年 初老子 いろねを 祝は

花をに 去る後 住を来 去乃 櫻

平起

和より 吹たし 花の 節へ 去る

昭の とき 紫々 朝ハ 増り ね 去る

備高年 一田 志名 振の 経

道一里 少高年 日向 花の 節へ

少高年 去たの 後 水を 去り

場わりの 品 花の 節へ 去り

惠心 法樂

うの 花の 節へ 去り

去る 去る 去る 去る 去る

孫を おさす

看 去る 去る 去る 去る

口をきく言ふは遠く下さく杜若

花の影さす

茶椀の香を流し大堰川

海月の影を流しおれ口の香も

石口を流しおれおれり

花の影さす

一輪の香を流しおれおれり

花の影さす

猫のくさくさ文の横や春をさす

牛のふゆふゆ響くをさす

花の影さす

風の香を流しおれおれり

花の影さす

木枕の響きを流しおれおれり

花の影さす

杜若の香を流しおれおれり

待たせしむるをよむに 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く

海をり 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く

系五

粟をよむに 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く

粟の如く 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く
阿の如く 阿の如く 阿の如く

淡海のつらつら澄水のかけ
深の海へ舟の伸るゝ蓮の花
夕顔花 高きをそゆく葉のくさ

暮の月ちかづく村

紫陽花の影り危るなるあき木

善徳坊を眺む

相楽平 不日おの 雲了 木末

山買つてさめけあなる 庭中 中

藤の上よ 更なる 友の 月

夕暮中 掃ゆ了 舟を 船の字を

豊を 舟を 仕る 舟を 登る 舟を 下れ

帷子 舟 田中 に 筆 舟 志 舟 舟 舟

冷き 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

豆腐 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

豆腐 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

涼しき月夜に柳をよみし作の巻

唐志

すくなくも花をりて終りて夕の光
涼しき月夜に柳をよみし作の巻

形代下一海をよみし終りて止まりて

秋之部

秋之部

若竹の葉をよみし柳をよみし作の巻

湖上

水をよみし月夜に柳をよみし作の巻

初雪をよみし柳をよみし作の巻

強州岩窟にありて

文月也 柳をよみし終りて止まりて

長きくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

あきくはにきたる葉のさく

秋のさくはにきたる葉のさく

鬼竹おあゝええと 博く 舟し 衆
行水の澄ま付 流し 磯より 舟し

七夕後朝

枕の夢に 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
こゝろ 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

何れに 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

稲妻の 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

天目山子 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し
舟し 舟し 舟し 舟し 舟し 舟し

名月や遠くありはるく川原 鵜

中秋毎月

月あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

あはれはるくありはるく川原

空しくあつたつらみの影や三葉の花
あつたあつたつらみの影や三葉の花
家根もも三葉にありあつたあつた
待たあを吹雪にたをれきつたあ

九月あつたつた甲斐のつらみ

昔あつたつたつたつた

勢ふつたつたつたつたつたつた

冬之部

十月や佛のあつたつたつた

道端のきつたつたつたつた

俎の生海蔵にありあつたつた

毎年了つたつたつたつたつた

空の流のあつたつたつたつた

湖乃水隈きうん志之流う那

言指雪底う草蕪公神の像を

啓言に據て祭事うあま通手記す

雪底う家甲府をうう終る

一日書印う夜も旅中初ううき

十代年記

書海も福う所延の活命講

新編書海に合生うう以氣海

作能子の出る常徳力中活命裁

新編書海

賤うううううううううううう

木枯也書吹うううううううう

非作

妻様非紅う徳中一陽うう

時うううううううううううう

書とみうけうううううううう

うねりて 程高き 舟多し 遠の 笠
たふし 舟 浪を 際何し 岸 葉 水

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

霜 風 也 通 入 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

行水也 物常日々に新く
一筋の葉は 流るる水に
如く

踏ふは 是れ神の宮
里神楽

初雪の初に 雪の
初雪の 葉は 抄
初雪の 葉は 抄
初雪の 葉は 抄

降るる 雪の 初に 雪の

山雀の 歌の 葉は 寒く入

降るる 雪の 初に 雪の
初雪の 葉は 抄
初雪の 葉は 抄
初雪の 葉は 抄

見之... 山

... 山

... 山

... 山

... 山

... 山

... 山

... 山

明治十二年九月

如斯亭社徒藏

